

でありました。何れとも知れど、戦いに参加しました。或時は大河の傍
 我らは攻勢陣に或時は市街戦に敵の陣下に突入する時は何れも
 可成り守衛する者や人の事は勿論だが、つねに死を覚悟した只、
 皇國の爲に東洋平和の爲め、死すは栄光守ちやんとす
 其が取をかくたに、父や人は至死の命に戦場に倒れ
 きました。父や人は所定の所親守ちやんとすやん、か、あややん
 を思つたせば、案のついで、軍の止めはかりませう
 かちやんに軍中とす。十二月五日の所傳りの文中に「在の中
 で一番悲しい事、それは貴方様の戦死の姿を見ました」とありま
 した。自分も十二月九日より十二日の晩までの苦戦はあつたやん